



第三書館 2,700円

「犯罪報道」の再犯

—さらば共同通信社
浅野健一著（大学文学部教授）

どんな分野においてもそうだが、そのままでの方向で着実に改善していけばいいことと、歴史の流れを逆転させねばならない局面がある。そう考え、とりわけ後者を実行することは対象が大きければ大きいほどむずかしい。このむずかしいことを共同通信の記者としての浅野健一氏は一九八四年に出版した『犯罪報道の犯罪』でやってのけた。すくなくとも裁判で十分な審議が尽くされるまでは事件報道は原則として「匿名」であるべきだという氏の主張はコペルニクスの転回を日本のメディアにせまった。以来、スウェーデン

のそれに範をとった氏のジャーナリズム論とその実践活動はメディア改革の大きな流れになっている。最近では氏の取材活動は英米などにまでのばされ、日本にメディア責任制度としての報道評議会を設立せよと奔走されている。

だが、第一作から十三年、これほど人権とプライバシーの擁護の必要性が指摘されるようになってきているのにまだ巨大メディアのほとんどが浅野氏の問題提起に応えていない。本書では報道被害を続発させるメディア企業の内実と一部ジャーナリストの無定見が怒りを込めて「実名」告発される。

もうけるためには何でもし、権力に迎合して恥じない一部メディアとその従事者にその「社会的犯罪」に見合う自覚が必要だという著者の気持ちは、本書の副題を「さらば共同通信社」としていることにもあらわれて

いる。渡辺武達（大学文学部教授）



財団法人国際問題研究所 3,200円

アメリカと宗教

森孝一編（大学神学部教授）

日本国際問題研究会による「現代アメリカ」シリーズの五冊目にあたる本書では、宗教を軸にして八人の執筆者がそれぞれの専門分野から現代アメリカを映しだそうとしている。

本書を読み進めていくうちに、読者は「合理主義社会」「ハイテク産業国家」などをキーワードとした「世俗化」された現代アメリカのイメージからは程遠い「宗教国家」としてのアメリカの姿が浮かび上がってくることに気づくだろう。編者自身が担当している「統計からみるアメリカ宗教の現状と特質」の章で明らかにされているように、一九九五年の調査ではアメリカ人の九六パーセントが神の

存在を信じると回答しており、全人口の八八パーセントが「ユダヤ・キリスト教的伝統」の宗教を信仰していることになるという。

移民国家としてスタートしたアメリカにとって大切なことは、自分たちが「何になろうとしているのか」という共通の未来であり、そんな彼らが自らを結び付ける柱として選んだのが、編者が「見えざる国教」と呼ぶところの「ユダヤ・キリスト教」的な宗教なのである。

政治、経済、外交などのアメリカを構成しているあらゆる要素の中を常に「宗教」は縦断している。こうしたアメリカにおける「宗教」のありようを知ることによって、読者はアメリカという国をよりよく理解する手掛りを得ることになる。

「知っているつもり」で実はあまりよく知らなかったアメリカを発見できる一書である。

関谷直人（大学神学部専任講師）

日本プロテスタント 諸教派史の研究

同志社大学人文科学研究所編

吉田 亮・

(天文学部助教授)

宮庄哲夫 ほか執筆

(天文学部教授)

本書は一九九二年度から始められた同志社大学人文科学研究所の「教派・教会の研究」の成果として、「概説」として五つの教派、「各論」として十の論文を集めてまとめられたものである。日本のプロテスタント教会は主にアメリカの宣教団体によって設立されたが、多くの論文で丹念にアメリカ本国の伝道局、宣教師文書を研究し、日本側の資料とつぎあわせるとい



教文館 5,200円

新しい研究方法の地平を切り開いたという意味で、記念碑的な書物となった。

宗教改革を経ないで日本に成立した教会が、自らの存在の根拠をどのように認識していくかは重要な課題である。その意味で、宗教団体法によって成立した日本基督教団への各派の参加の過程と戦後にここから離脱した諸教派、またそれ以後もこれに留まって「一つの教派」(本書「まえがき」)となった日本基督教団のそれぞれの教会はこの課題の中で苦闘してきたのである。教会に属し教会の伝統を考えるもののみならず、文化交流と受容の意味からも意義深い書物であり、研究者必読の書である。

原 誠 (大学神学部助教授)

日本の文化

笠井昌昭著 (天文学部教授)



ベリかん社 2,200円

著者は博学と文章家として知られるが、そのなよりの魅力は歴史展開の本質部分をいともあっさり平易に描き出してくれることである。この魅力は日本の文化に関する八編が収録された本書でも十分に発揮されている。読者は玄関や稲荷鮎を糸口に日本の家や稲荷信仰の本質を語る手際の鮮やかさに驚かさず、「日本文化の理解のために」や「日本における美意識の展開」に示される通史的枠組みの明快さに目を見張るであらう。

例えば前者では、日本文化は鎌倉中期を境に明瞭性を特質とする彫塑の世界と不明瞭性を特質とする絵画的の世界に区分さ

れ、今日日本文化の代表とされている茶の湯・いけ花・能などが、実はすべて絵画的世界において成立したものであり、それらに共通して「不明瞭性」という性格があることが指摘される。外国人から日本人や日本の文化はいまいだ、わかりにくいといわれて、卑屈な薄笑いのごまかす日本人はさすがに少なくなっただろうが、いまだに「あいまいさ」を「不明瞭性」と換言して日本文化の本質的構造を堂々と説明できる日本人が多いとも思えない。ぜひ一読の書である。

それにしても、近年の細部研究偏重の時代性のなかで著者の著述に触れると、細部研究を積み上げること、歴史の本質に迫る大枠を示すことはまったく別個の作業であり、別の才能や体質、さらに明確な通史的問題意識が必要なのだというのを改めて痛感させられる。

山本謙治 (天文学部嘱託講師)



研文出版 9,000円

日中戦争期における中国知識人研究——もうひとつの長征・国立西南聯合大学への道

楠原俊代 著

(大学言語文化教育研究センター教授)

本書は、西南聯合大学の設立に至るまでの経緯を明らかにすることによって、日中戦争期における中国知識人の実像にせまり、近代中国の空白部分を跡づけようとするものである。

国立西南聯合大学とは、日中戦争中の八年間にわたって北京・清華・南開の三大学を聯合し雲南省昆明に設置されていた大学である。この国民政府治下の中国西南部最奥地の大学に、それこそ諸学問分野の最高権威が集い、学生では中国最初のノーベル賞学者他の優れた人材を

生み、内には「學術の自由」の氣風をうち立て、外からは「民主の堡壘」と高く評価されていた。だがしかし著者によれば、近代中国の知識人、とくに国民党と共産党の統一戦線下にあった日中戦争期における知識人については、いずれの文献資料も、戦後のイデオロギーと社会体制の枠のなかで刊行されたものであり、全般的な研究はこれまでほとんどなされていまいという。著者は十年あまりの歳月を費やし、膨大な資料を駆使し日中戦争下における中国知識人の精神史の一面を克明に描出しようとしたばかりでなく、それはまた、これまでほとんど顧みられることのなかった角度から日中関係史を跡づける作業なのでもあり、従来の研究の空白を補ったところは、この研究領域における最初の専著として、大きな貢献を果たしたものである。

銭 鷗

(大学言語文化教育研究センター専任講師)



柏書房 3,800円

ナショナリズムとセクシュアリティ

ジョージ・L・モッセ 著

佐藤卓己ほか訳

(大学文学部助教授)

この本の題名を見ただけでわくわくする。なぜならば、この二つの概念が、近現代史を専門としている歴史家の注目をいま浴び、また頭を悩ましているテーマだからである。二つをつなぐものは「近代」。近代は境界線を作り出していく。それは、国境とか正常・異常を分ける境界である。その境界を作る正当化の論拠としてこの本で登場してくるのが、国民主義(ナショナリズム)と市民的価値観(リスベクタビリティ)という二つの概念である。その境界線からは

み出したマイノリティが、異常

だとレッテルが貼られていくプロセスが追われる。マスターベーション、同性愛等々。

挑発的議論に、良識ある紳士淑女はあつげにとられ、赤面するかも知れない。しかし、読むにつれて読者は、近代とは何だったのか、という大問題をしだいに考えていくことになる。そして、それが果たしてナチズムへとどうやって流れ込んでいくのか。その謎解きを楽しんでみてはどうだろうか。

こんな思わぬところに視座をおいて、学界の最先端の問題を挑発的に論じるのが、果たしてモッセだと知ると合点する。常に挑発的であろうとする佐藤氏と共鳴するのだろう。佐藤夫妻はこの他にも、同じ柏書房からモッセの翻訳を出されているので『大衆の国民化』、その挑発的なおもしろさにとりつかれたら、そちらも読むことを勧めたい。

星乃治彦(熊本県立大学文学部助教授)



明石書店 2,000円

イギリス文化と国際社会

小野 修編・著 (大学名誉教授)

中井 晨 (大学言語文化教育
研究センター助教授)

バート・クロス (大学言語文化教育
研究センター助教授)

坂本完吾 (大学文学部教授)

井上勝也 (大学文学部教授)

梅津 實 (大学法学部教授)

田口哲也 (大学言語文化教育
研究センター助教授)

押本年真 (大学言語文化教育
研究センター教授)

ほか執筆

イギリス通の九人の学者たちが長年の研究を平易な口調で語りかけてくるのが本著である。いわばイギリス紹介の体裁なのだが、その易しい語りにも関わらず内容は学者たちのそれである。副題「海洋国民の知的エネルギー」は過去大きく世界を動かしてきたイギリス——そして現在勢いを弱めてきているとは言

うものの国際社会を変えうるイギリス——その知的エネルギーに対する著者たちの評価と期待をにじませたものといつてよからう。

本著の目的はそうした力をもった「イギリスの素顔をとらえること」である。著者たちはそれぞれにイギリスを案内してくれる。それは自然であったり、現代の演劇であり、パブリック・スクールであったり、政界の腐敗であったり、女性の参政、アメリカとの関係、詩と信仰、海洋との関わり、処刑された王の話であったりする。どの章から読んでも構わない。読んでいて楽しいのは多くのエピソードがあることである。鳥瞰図の歴史展望と著者たち自身の経験はイギリスに対する客観性と同時に親近感を読者に与えてくれる。この書を手にする読者は「知的エネルギー」が求められ、与えられるのは確かである。

杉野 徹 (女子大学教授)

近代日本の地域社会と名望家
高久嶺之介 著



柏書房 4,600円

近代日本の地域社会と名望家

高久嶺之介著

(大学人文科学研究所教授)

明治維新以降、近代化の波が地域に押し寄せるなかで、そこに生きる人々が、それをどのように意識し、それにどのように対応していったのか？

国家史的視点からでなく、あくまでも具体的地域にこだわり、従来「国家支配の末端」「中間層」といわれていた、いわゆる地域の名望家たちをその呪縛から解き放ち、彼らの活動の分析を通して、生き生きとした地域の姿を描き出すことが本書の

目的である。

近代日本における町村の行政運営は、国家からの委任業務を基本的にこなささえすれば、ある程度自由で、融通無碍に機能していたといつてよい。その運営にあたって、名望家といった地域の担い手たちの関心は、地域の繁栄に向けられていたのである。その繁栄が、地域の社会的、経済的位置、さらには自然的風土に規定され、独自で個性的な意味合いを持つ以上、彼らの活動も当然地域差を持った個性的なものとなるのである。

これらの分析をおこなう上で氏の方法の特徴は、いくつかの自治体史での丹念な史料調査を基礎に、安易で短絡的な一般化をいましめながら「私流の目の位置から」「素直に描き」だすことにあった。

本書はその意味で、氏の学風と持ち味が十分に発揮された好書といえるであろう。

西村 卓 (大学経済学部教授)

ハワイ日系移民の教育 史―日米文化、その出会いと相廻

沖田行司著 大学文学部教授

ミネルヴァ書房 2、800円

「移民」という言葉にはパワーがある。教育学の諸研究にもこの言葉は強烈な現実性をもって課題を投げかけている。近代日本教育思想史にしっかりとした基盤を得ている著者は、解明される機会の少なかつた、日本からの移入地における「移民教育」をあえてとりあげ、歴史的考察としてがつしりと取り組んでいる。その姿勢には、突つき回したり及び腰は見られない。先年「いざり」という相撲の離れ技があったが、それに似ている。

移民研究において、移民送出国と受入国そして移入した人々による社会、これら三者の相関関係が重要であると言われている。本書は送出国と移民社会を中心に、受入国との国際関係も視野に入れた複合的な検討を行っている。これは三者の関係性を明らかにする上で極めて有効で、かつ、まだあまり多く

成し得ていないアプローチであると言えよう。

「一部 移民教育論の諸相」では、世紀転換期から1920年代に至る日本国内での移民教育論を扱っており、「欧化と伝統の相廻」という近代日本における異文化受容の課題が、移民教育を通じてどのように表出したかを論じている。「二部 ハワイ日本語学校の成立と展開」では、「二部」で説明された教育論は移民にとって、異文化受容への道しるべではあったが、彼等を規定していった要因はもつと複合的なものであったことが論じられている。即ち、移民社会の内外からの文化的あるいは政治的相廻があり、アイデンティティは「国家としての日本」から「異文化としての日本」へと重層的に変容していった。

本書が提示した異文化受容の重層性や政治性は、広く異文化交流や異文化理解そして異文化間教育の見落とされがちな原点であることを忘れてはならない。

吉田 亮(大学文学部助教授)

ことわざの力―この 共生への知恵づくり―

村瀬 学著 (女子大学助教授)



洋泉社 2,000円

村瀬さんの思想は私たちのすぐ近くにいて、暖かい人の心を感じます。この新しく出された本もその思想を分かりやすく伝えてくれます。「犬も歩けば棒に当たる」、私はこのことわざを「うろうろしていたらロクなことがない」「動けば事故もあるけどいいこともあるかも」などと自己流の解釈をしていました。

ところが村瀬さんの掌にのると古くさいことわざも一変して今を生きる光になってきます。村瀬さんによると、犬は「所」を最もよく意識する生き物としてイメージされます。「自分の所」を中心に動く犬は、余所へ出てい

くことは少なく、あえて出ていく犬は余所で思いがけないことに会ふのです。「世」はたくさん「所」でできています。一つ一つの「所」は「閉ざされたシステム」ですが、その「所」から「所」への移行「渡し」の思考こそ、ことわざではないかと問うていきます。異質な「所」、異質な「文化」を行き来し、「違う価値観」の間に橋をかけ、「異族」が共生できる知恵を創り出すこと、それが「力」になることを中世の人々によく知っていたのです。村瀬さんは言います。「世界」は再びたくさんな「世界」に分かれつつある。そしてそこに異質な境界を感じる人がたくさん出てくるだろう。そのときに求められるのが、うまく境界を越えて行き来できる共生の知恵なのだ。その知恵が「ことわざ」の中に「力」としてつまっている」と。この本はそんな「未来」に向けられた本なのです。

上野えり子(天和郡山口市立片桐中学校教諭)



ミネルヴァ書房 3,500円

「老農時代」の技術と思想―近代日本農事改良史研究―

西村 卓著（大学経済学部教授）

本書は、日本近代黎明期に「寒水浸法」、「土囲い法」、「冬蒔き法」など独自の農事改良法をもつて「老農時代」を演出した林遠里と勸農社、そして遠里の技術と思想を普及しようとして、福岡の地から全国各府県に派遣されていった実業教師達、遠里農法を継承しながらその在地に即して改良していった人々の活動を豊富な資料をもとに描いた書である。

本書の重厚さをきわだたせているのは、林遠里と勸農社に関する資料のみならず、遠里農法

の普及および継承していった人々の資料を求めて島根・京都・栃木・長野など全国各地の資料を博捜し、徹底した実証でその活動を跡付けている点である。本書の図表や注を見れば、林家文書だけでなく、その土地土地の資料がいかに有効に使用されているかわかるだろう。

彼らの足跡を明らかにする著者のモチーフは何か。農業近代化を含む「近代の相対化」ということであろう。遠里農法は、その後農学士達によって「非科学性」が指摘され、一部を残して近代農法にとって替わられていった。現代の有機農業を見据えながら、著者は「近代的呪縛から老農農法を解き放ち、当時の農民の一般的思考原理にもとづき、農民たちの目を通してその『合理性』を再評価」し、「伝統という流れのなかで、日本農業をとらえなおす」ことを主張する。論争の書でもある。

高久嶺之介（大学人文科学研究所教授）



有斐閣選書 1,800円

ペットの法律全書

吉田眞澄はか著

（大学法学部教授）

学問を通じて結ばれる心やさしい動物好きの師弟三人が、ペットに関する法律の本を書いた。その第一のねらいは、ペットをめぐる様々な法律問題とその解決策を、平易に説き明かすことにある。類書がないだけに、ペットを飼育する人にとって、頼りになるだろう。また法律そのものに興味がある読者は、ペットの飼育をめぐる生起する具体的な問題を通じて、法律的な考え方がよりよく理解できると思う。

しかし本書が単なるハウトゥーものでも法律概説書でもないのは、扱う題材が血の通う動物だ

からである。契約上のトラブルも、対象が大切なペットであれば、その解決は理屈や金銭だけで片付かない。人間の感情や好き嫌いがどうしてもからむ。にもかかわらず、社会一般はまだまだペットに冷たい。ペットと飼い主にとって、とかくこの世は住みにくいのである。その住みにくい世の中を、法律を上手に使って少しでも住みやすくしようと、著者たちは様々な提案をしている。法律解説の背後に顔をのぞかせる著者三人の犬や猫に対する愛情の深さが、かわいい挿し絵とともに、この本独特の魅力である。

ペット禁止の賃貸マンションに住み、近在のペットよりしつけの悪い息子二人を飼育する私は、本書読了以来、水槽のなかで手足を伸ばして寝ころがる緑亀にむかって、「おまえさんにも法律問題があるんだよ」と、ときどき言い聞かせている。

阿川尚之（米岡弁護士）

論 近代近江商人経営史

末永國紀著

(大学経済学部教授)

本書は著者がこれまでに著述されて来た膨大な研究業績を集大成した四百頁を超える大著であり、長い歴史と蓄積を有する近江商人研究のなかでも、近年における最も注目すべき業績と位置付けられよう。

本書は序章と七つの章からなり、各章では著者の二十年を優に超える近江商人研究の出発点であり、研究の基盤でもある小林吟右衛門（丁吟）を中心に山中兵右衛門、中江勝治郎（三中井）、西川甚五郎らの諸家の幕末から明治期の経営が詳しく分析



有斐閣 7,500円

される。特に第4章「企業勃興と商人資本」では近江商人に限らず、三都をはじめ主要十二府県の商人資本の企業勃興期での企業設立・経営への関与と動向を網羅的に把握・分析された。

また第6章「大陸の近江商人」では中国、北米にも進出した三中井を事例として近江系企業の海外経営にも視野を広げるが、著者はこの「広域志向性」にこ

そ近江商人の特徴を求め、それが企業活力の真髄でもあったことを本書で見事に実証された。

近江商人という名称から近世のローカルな商業活動を連想しかねない一般読者は本書により予想を完全に裏切れ、国際的視野に立つ著者独自の近江商人観に圧倒される思いだろう。豊富な図表、精緻な索引に加え、丁吟の近江商人郷土館所蔵第一級史料が多数写真で紹介されるなど読み易く工夫されている。

小川 功(滋賀大学教授)

デザインの国イギリス ―用と美の「モノ」づくり―

山田眞實著

(大学言語文化教育研究センター助教授)



創元社 2,500円

本書の「あとがき」に記されているように、一九九五年はジョサイア・ウエッジウッドの没後二百年、一九九六年はウィリアム・モリスの没後百年にあたる。本書は、近代イギリスのデザイン史に大きな足跡をのこしたこの二人を中心に、近代イギリスのデザインの系譜を新しい視点から辿る試みとして、大いに注目に値する。

私が本書の掲げるテーマに関してもっとも興味をおぼえた点は、十八世紀後半、産業革命の流れの先頭を走りはじめたイギリスにおいて、その流れに沿っ

て新しい事業を企てたウエッジウッドと、十九世紀の半ば、産業革命の流れに逆らって「手仕事的美」を追求したモリスとを、デザインの系譜において、どのようにつなぎとめるかという点であった。

著者は、この問題を鋭い洞察を通して解きあかすことを試み、その結論として、さまざまな点で多くの違いをもっていたこの二人ではあったが、二人が共有していた「用と美の兼ね備わる日用品を、すべての人々の生活に提供したい」という精神こそが、近代イギリスのデザインの系譜において二人をつなぎとめるものであった、と指摘している。

本書は、近代イギリスのデザインの流れについてのすぐれた入門書であるとともに、この分野においていくつかの重要な問題を提起する興味深い書物であると思う。

高山 修(女子大学名誉教授)

ゴルフとイギリス人

尾崎 寛著
(女子大学教授)



ちくま新書 660円

かつて名実ともに大国として世界に君臨したイギリスが数多くの近代スポーツを創り上げてきたことは周知の事実である。厳密には、逸速く「ルール」を定めてきたと言うべきなのだが、そのなかの一つであるゴルフにかくも愉快な物語が秘められていたとは、本書を手にするまでついぞ知ることはなかった。実のところ、評者にとって、ゴルフに関する書物を読むのは今回が初めてのことであった。単にきつかけが無かったというだけのことはあるが、一方で、好奇の目を閉ざすような偏見が心のどこかに渦巻いていたこと

も確かである。つまり、ゴルフを、裕福な方々の道楽か、さもなくばそれに付き合わされる哀れな御仁の義務の何れかだと決め込んでいたのである。

本書は、そのユーモア溢れる語り口で、こうした捉え方が、ゴルフの本質的な部分を見落としたものであることを悟らせてくれる。すなわち、ゴルフには、人生と同じく「幸せ」が付きものだということ、それである。ゴルフにも、またイギリスにも精通する筆者は、この点を充分に見極めておられる。歴史を辿りながら、またあるときは相対的に、独特の筆致で紡ぎ出されるゴルフ論、これがイギリス文化論でなくて何であらう。

ゴルフを人生に重ね合わせる序盤の譬すらピンとこなかった評者のような者にも、遙か彼方に青々と輝くグリーンが臍氣ながら見えてくる、そんな爽快感に満ちた一冊である。

湯山健一(女子大学専任講師)

源氏物語探求

都城と儀式

廣川勝美著(文学部教授)



おうふう 3,800円

本書は著者の四十年間の『源氏物語』研究における一つの到達とでもいうことができようか。かといって旧稿を温め直したものではない。むしろここ数年来の源氏物語研究をベースに置きながら、現在進行形で進捗する研究状況をも加味しつつ全面的に書き下ろした一書である。著者は『源氏物語』を「歴史叙述」のうちに対象化しようと試みる。斯る設定は『源氏物語』を史書、儀式書をもって注解を行う室町期の『河海抄』以来の准拠論への眼差しと軌を一にする。と同時にさらにもう一步踏み込んで物語全体への釈義を根

本から捉えようとするものである。著者は自らの求める注解と釈義への視点として都城と山河、行事と儀式、宴饗と和歌をとり出す。そこから歴史意識への総体的探求を行うのである。

『源氏物語』の根底に流れる歴史意識が自ずから要請する聖代の具現化は、律令に基づく天皇の御代の華やかさに他ならない。そのことは、行事に伴う宴饗における漢詩や和歌などの文華として咲き乱れる。中心たるは天皇とその御代への稱辭である。儀式の整備と御代の安定は律令の目指す理念の達成である。四代の天皇の御代を記す『源氏物語』を歴史叙述とみる本書の最終的意図は、歴史と文学を一体化しようとする点にある。著者の文学研究への熱情と新たな展望への模索に大いなる刺激を受けつつ、更なる続編が待ち遠しい。

神尾登喜子(阪南大学国際コミュニケーション学部助教授)